

夏は毎日、海水浴！

冬は山に入って秘密の基地づくり！

小笠原から参加した子供たちの遊びと暮らし

今回の B&G 体験クルーズには、小笠原から 11 名のメンバーが参加。道中、全国から集まった子供たちを前にして、島の生活や自然についてレクチャーしてくれました。アンドリーでは 4 名の子供たちへインタビュー。島の暮らしぶりや日々の遊びについて、いろいろ教えてもらいました。



携帯電話なんて必要ない！

レクチャーの際、小笠原から参加したある子が「東京に出た際、駅に自動改札機があるのに驚きました」と発表すると、「それなら、小笠原ではどうやって改札しているのですか」と質問する子がいました。当然ながら、「島には、電車は走っていません」との答え。「当たり前じゃない」という声が出て会場はちょっと笑いに包まれましたが、このやり取りで改めて島の生活を考えてみた子も少なくなかったようでした。

一方、電車のない小笠原の暮らしですが、不便さを訴える島の子供たちは 1 人としておらず、むしろ自然あふれる島で実に伸び伸びと暮らしている様子が伺えました。インタビューでも、そんな子供たちから活発な話をたくさん聞くことができ、あっという間に時間が過ぎていきました。



インタビューに応じてくれた 4 人
向かって右から、登地君・松原君・假屋さん・梅野さん

最初の質問は、「どれぐらいの割合で東京に行くのか」。これには、みんな口を揃えて「だいたい年に 1 回ぐらい」と答えてくれました。夏休みを利用して親戚の家に行くケースが多いようで、登地亀太郎君（小 6）は「東京を基点に山へキャンプに行くこともある」そうです。

「東京に行ったら何が楽しみ」なのか

聞いてみると、「映画館に行くこと」と一斉に声を上げました。「テレビとは比べ物にならないほど迫力があるから」

だそうで、「漫画を買い込む」ことが次に挙げられました。東京と小笠原を結ぶ輸送機関は、

6日に一度入港する「小笠原丸」のみ、そのため、新聞は一週間分まとめて各家に配達され、雑誌や書籍も通常の発行日に買うことができませんが、都会の子と同様、島の子供たちにとっても漫画は大きな楽しみの1つになっているようです。

お土産をたくさん買い込んで「ふじ丸」に乗り込んだ小笠原の子供たち。船上生活の感想を聞いてみました。

「このクルーズに参加した動機は、客船「ふじ丸」に乗ってみたかったということがありました。思っていたとおり、(定期便)の「小笠原丸」に比べて部屋が豪華なのでうれしかったけど、船酔いの辛さだけは「小笠原丸」といっしょだった。でも、乗っている間にたくさんの友だちができたのは収穫でしたね」(松原勇魚・中1)。

「最初のうちは、班の子たちとなかなか話しができず、どうしようと思いましたが、時間が経つにつれて仲良くなれたので、うれしかった」(梅野なぎさ・小6)

「確かに、内地の子たちの雰囲気は島の子たちとちょっと違うので、輪のなかに入りにくいところがありました。明るさが違うというか、内地の子たちは、こちらから声をかけても、すぐには話してくれないところがありました」(假屋和希・中2)

「内地の子が、みんな携帯電話を持っているので驚いた」(登地亀太郎・小6)

携帯電話に関しては、ほかのみんなも驚いたようですが、だからといって特に自分も持ちたいとは思わないと口を揃えました。

「島にいるぶんなら必要ない。だいたい、自分だけ持っていて友だちと話せないじゃないですか(笑)」(松原勇魚・中1)。

みんな、松原君と同じようなことを言いました。そもそも、遊ぶところや学校などが歩ける範囲にあって生活しているので、むしろ持っていたら邪魔になって煩わしいそうです。



参加者全員にお別れの挨拶をする小笠原メンバー

海底の砂が光る美しい海を紹介したい

島の生活について聞いてみました。やはり子供たちにとっても6日に一度入港する「小笠原丸」が楽しみなようです。

「注文していた漫画などが運ばれてくるときは、港に行って待っていますが、港の周りに大勢の人が集まって歩けなくなってしまうほど賑わいます」(登地亀太郎・小6)

入荷を済ませた食料品店や日用雑貨のお店などにも行列ができるそうで、この日ばかりは都会並みの混雑になるそうです。テレビゲームのソフトも送ってもらうことがあるそう

ですが、内地の子供たちほど関心はないようです。

「テレビゲームは持っていますが、あまりしません。友だちが、みんなしないからです」
(松原勇魚・中1)。

どの子も同じで、持っていることはあっても夢中になるほどの楽しさは感じないと言います。

「テレビゲームなんかより、部活でサッカーをして、休みの日には海に行って遊ぶほうが楽しいからです」(松原勇魚・中1)。

海では、どんな遊びをしているのでしょうか。

「春は広場で鬼ゴッコなどをして遊んでいますが、夏から秋までは、もっぱら海ですね。灯台など高いところに行って、みんなで飛び込みの腕試しをしています」(松原勇魚・中1)。

10m もの高さから飛び込むこともあるそうですが、女の子もみんなするそうです。

「あとは、停泊している船のロープを伝わってデッキに乗り込んだりしています。また、灯台の上のほうにハシゴがあって、それを登っていくのもスリル満点だな。冒険の遊びが楽しいんです。だいたい1年の1／3は海ですね。夏休みの間は、毎日海に行って遊んでいます」(松原勇魚・中1)。



「私が住んでいる母島には、たくさんの入り江に浜辺がありますが、特にボートに乗らないと行けない場所は最高です。15分も走ると、そんなところがたくさんあって、海底に広がる砂浜が日の光に輝いて、すごくきれいです。魚もたくさん見ることができるので、内地の人たちにも見せてあげたいですね」(梅野なぎさ・小6)

「海もいいけど、内地の人には島の山も歩いてもらいたいなと思います。緑が深くて、きれいな鳥がたくさんいます。山を歩いていると、そんな鳥の声と海の音が入り交ざって、とても楽しいです」(假屋和希・中2)

みんな海で遊ぶことが楽しいようですが、冬場はどうしているのでしょうか。

「山に入って、友だちと秘密の基地をつくるんだ。冬から春にかけては、もっぱら、そんなことをして遊んでいます」(松原勇魚・中1)。

楽しそうな島の生活が想像できますが、みんな将来はどんな仕事に就きたいのでしょうか。

「島は好きですが、やりたい仕事が少ないんです。これから、どんな仕事を選ぶかまだ分かりませんが、場合によっては内地に行くことになると思います。いまのところはパティシエになりたいですけど」(梅野なぎさ・小6)

「私も、まだ将来何をするのか決めていませんが、小さいときは花屋さんになりたいと思っていました」（假屋和希・中2）

「人ごみが好きじゃないから東京には住みたいとは思いませんが、部活でサッカーをしているのでスポーツ選手になりたいですね。そうでなければ、子供が好きなので子供に関係のある仕事がいいですね」（松原勇魚・中1）

「家が漁師なので、後を継ぎたいです。いま、お父さんと一緒に漁に出ることもありますが、いろいろな魚が釣れると楽しいし、仕事をしているお父さんがカッコいいんです。ただ、内地に行って勉強だけはしたいと思っています。それから島に戻って、漁師になりたい」（登地亀太郎・小6）

最後に、小笠原への交通の便がよくなって便利になってほしいかどうか聞きました。

「母島は発展していませんが、それでも最近は家が増えてゴチャゴチャしてきました。これ以上、ゴチャゴチャしてほしくありません。このまま島を大事にしていきたいです」（梅野なぎさ・小6）

「そうだね。島はこのままにしておきたいね。だいいち、発展して便利になってしまったら、内地に行く楽しみがなくなってしまうじゃないですか」（松原勇魚・中1）。

いろいろな質問に元気に答えてくれた小笠原の子供たち。伸び伸びと暮らしながらも、しっかりと自分の意見や考えを持っていることがよく伺えました。これから先、彼らがもっと、もっと大きな人間に育ってほしいと願います。



小笠原から参加した 11 人